



# 電化厨房換気研究の忘れえぬ 二人の恩人

宮永 俊之 一般社団法人 日本エレクトロヒートセンター 理事

2022年の干支は寅年。「寅」は動くの意味で、春が来て草木が生ずる状態を表しているようだ。干支の意味とおりに、今年こそコロナ禍を克服し、通常の社会生活を取り戻したい。

さて、2021年8月に国土交通省「建築設備設計基準（茶本）」の電化厨房換気の記載が19年ぶりに改定された。換気設計指針（JEHC103-2017）で定めた電化厨房にふさわしい省エネ換気方式の普及につながる重要な改定である。当センター「業務用厨房における換気設計基準検討WG」の小峯裕己主査（千葉工業大教授）をはじめとする関係者の熱意と努力の賜物であり、弊所もその一翼を担えたことを誇りに思う。

弊所の電化厨房換気研究は、東京電力法人営業部（当時）からの要請で2008年に始まった。平たんな道のりではなかったが、多くの関係者に助けていただき、時に厳しく指導いただきながら、なんとかやってこれた。忘れえぬ恩人が二人いる。大成プラント（株）元社長の根本和男さんと東京電力HDの花房輝さんである。茶本改定を心から喜んでくれるはずの二人は残念ながら故人である。

根本社長は、弊所研究の最重要装置である「換気性能評価室」の設計・施工者である。研究開始当初、換気データ取得装置をいち早く構築・設置することが弊所の最重要ミッションだった。しかし、当時、厨房換気について弊所に知見がなく、困りはてて相談したのが、他研究グループの空調設備を手掛けていた社長であった。江戸っ子気質の技術屋社長は二つ返事で「やったことないけど、やってみよう」と笑いながら言ってくれた。それから数か月、設計会議で社長は厳しいダメ出しをもらいながら、図面を数知れず書き直して、唯一無二の設計書を仕上げた。装置の入札は、一流設計事務所との一騎打ちになったが、僅差で社長の会社の落札が決まったとき、うれしく泣けたことを思い出す。社長は実験が軌道に乗ったのを見届け、2015年2月に闘病の末逝去された。享年77だった。社長が精魂込めた装置は、2010年に完成後10年間休みなく稼働し、貴重なデータを生み出し続けた。昨年春に役目を終え、今は静かに解体の時を待っている。

花房さんは、研究開始から数年間、弊所の厨房研究をマネジメントいただいた。研究の開始当初は試行錯誤が続き、うまくいかないことだらけだった。研究進捗会議でもめることが多かったが、温厚で誠実な花房さんは弊所の事情（愚痴も）を静かに聞き、弊所の弁護を何度もしてくれた。そして、時に一緒に怒られたりした。今でも申し訳なく思う。そして、研究が軌道になったころ花房さんは異動で担当替えになった。時がたち思いがけず再会したのが2018年のことである。電力会社施設の厨房で換気量低減試験を実施することになり、東京電力の担当者が花房さんであった。研究所社員食堂の厨房が対象であったが、換気装置の改修やセンサの取り付け、社内調整など平日休日関係なく奔走いただき、データをしっかり取得できた。試験報告書作成に取り組んでいた2019年2月に花房さんの訃報が突然飛び込んできた。亡くなられた当日の夜まで普段と変わらず仕事されていたとのこと。享年54の若さ。苦しい時期を共に戦った戦友だった。

弊所狛江地区に設置した装置の撤去が進み、研究は一区切りを迎えたが、電化厨房普及に向けた取り組みはまだ途上である。引き続き、換気設計指針、電化厨房の普及活動を微力ながらお手伝いできればと考えている。

(みやなが としゆき) 一般財団法人 電力中央研究所 副研究参事